The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ねじの回転」に於る「視点」とその意味
Author(s)	舟阪, 洋子
Citation	大阪外大英米研究. 1980, 12, p. 21-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ねじの回転』に於る『視点』とその意味

舟　阪　洋　子

ヘンリー・ジェイムズの「ねじの回転」— Henry James, "The Turn of the Screw" (1898) — についての論争は，作品自体よりもよく知れわたっているかもしれない。Edmund Wilson が1934年に「物語の語り手の家庭教師は性的抑圧による神経症患者で，幽霊は本当の幽霊ではなく家庭教師の見た幻覚である」[1]と論じて，この中篇に全く新らしい解釈の可能性を示唆して以来，彼を支持する人々と，それに反対する人々 — 即ち，ブライ阪には本当に幽霊が存在して家庭教師は二人の子供をその邪悪な手から勇敢にも救い出したのだ，と主張する人々 — とが交互に，作品の中から又ジェイムズの種々の言葉の中から，自説を証明する「証拠」を提出しあって華やかな論争を展開してきた。[2]

私はこの「ねじの回転」をここでもう一度論じようとしているのであるが，それは勿論，新らしい「証拠」を用意してその論争を続ける意図があるからではない。提出されてきた数々の「証拠」が決定的なものではなかったということは，今だにその論争に決着がついていないことからも明らかである。そして私の考えでは，その決着はおそらくつくことがないであろう。それはこれから示すように，この作品の全体を通して二つの読み方（幽霊実在説と幽霊幻覚説）がほぼ完全に成立可能であるからである。そして読者の前に二つの読み方があるばかりでなく，さらに重要なことには，語り手の家庭教師自身がこの二つの読み方の間を揺れ動いているのである。彼女自身が幽霊実在の客観的証拠を熱心に追い求め続け，その追い求めること自体がこの物語となっていることを，私達は最後に発見する。本稿で私はジェイムズが語り手とした名もない若い家庭教師の揺れ動く眼に注目しながら，「ねじの回転」における「視点」の意味を考え直してみたいと思う。

2

「ねじの回転」は言うまでもなく，その大部分が家庭教師の一人称によって語られている。その「私」が幽霊を見たと言い，幽霊は悪魔の手先で二人の純真な子供を堕落させに来ているのだ，と断言する時，そもそも何故私達は彼女の言葉を疑うことを考えるのだろうか。Alexander E. Jones は「どんな物語でも一人称語り手によるものなら，その語り手は全体として信頼できなければならない」という。勿論欠点のある語り手はいるだろう。トウェインのハック・フィンやフォークナーのベンジーのように。又，クリスティーの「ロジャー・アクロイド殺人事件」に於るドクター・シェパードのように意識的にある部分を読者に語らないという語り手すらある。しかし「語り手は永遠に読者をだましてはいけない。何故なら一人称小説の基本的な約束事は語り手への信頼でなければならないからだ。[3]」 確かにこの Jones の意見は一般論としては正しいかもしれない。しかし問題は，「ねじの回転」が純粋な一人称小説ではないという点を彼は無視してしまっているのだ。

「ねじの回転」はフレーム・ストーリー（frame story）というべき形をとっている。即ち，読者はいきなり家庭教師と共にブライ邸に到着するのではなく，まずクリスマスイブの古いお屋敷の暖炉のそばへ導びかれる。そこでは小説家らしい「私」とその友人ダグラス，そしてその他数人の男女が冬の夜の余興に，とっておきの怪談を披露しあっているところである。ほぼ皆の話が出揃い，ぼつぼつ別れようという間際になって，何かためらっていたダグラスが幽霊が二人の子供に現われたという話を始める。それは彼が妹の家庭教師だった人から聞いた話で，それに関する彼女自筆の手記を持っていると彼はいう。そして彼は皆をさんざんじらした末に，ついに三日目の夜その手記を読み始める。というところで問題の家庭教師の手記が始まるわけである。

このフレームの役割を Jones は，(1)本来口誦による幽霊物語を扱うにふさわしい場を作り出す為，(2)手記という形をとることによって，物語に本当らしさ，権威を与える為，(3)語り手の家庭教師についての必要な情報を読者に与える為，という風にまとめている。[4] しかし私にとっては，このフレームは作者と家庭教

師の間，そして同時に読者と家庭教師の間の距離を拡げることに，より役立っているように思える。即ちジェイムズは，家庭教師の一人称による手記をフレームの中に納めることによって，家庭教師が一人称語り手として自動的にもっていた絶対的な権威を奪ってしまったのである。家庭教師の言葉は決して作者の言葉ではなく，それをどう解釈するかは読者が作品の中から決定せねばならない。そして私達が「ねじの回転」を最初のフレームの部分から読んでゆく時，彼女が最初から，何にせよ客観的報告を期待できる信頼すべき人物としては登場しない，ということに気付くのである。ハンプシャーの田舎の牧師館で育った娘，それ故に世間知らずで，視野が狭く，ピューリタン的特性を持っているであろう娘が「夢か古い小説の中」でしか出会ったことのないような魅力的な中年の紳士に恋をして，彼を喜こばせる為に，雇い主とは連絡をとってはいけないという奇妙な条件をつけられた家庭教師の職を無鉄砲にも引き受ける。ダグラスがいかに彼女をほめようと（「彼女はこの上もなく魅力的な婦人でした」「彼女は家庭教師としては今まで知る限りで最も素晴らしい人でした。どんな地位であれ，それにふさわしい人だったでしょう」）[5]，当時２０才頃だったダグラスが十才年上のその女に恋をしていたらしい，それにほめられている家庭教師は手記の事件の十年後の姿なのだ，という条件がある以上，手記に登場する家庭教師はまだ間違いを犯して当然の状況にあった（勿論犯すと決まったわけでもないが）という事実は消えない。ジェイムズ自身はH. G. Wells への手紙（１８９８年１２月９日付）で「私は彼女の個人的事情は閉め出して …… neatness，firmness and courage という（語り手となるに）最も明らかで不可欠な性格を与える以外は終始非個性的にするよう努めた」といっているが，実は彼女は今述べたように充分に複雑な個人的事情を背負い，語り手の権威を奪われた上で語り始めるのである。

勿論それは語り手の家庭教師がOscar Cargill[6]の考えたように「病的な嘘つき」だったという意味ではないし，Wilsonのいうように「性的抑圧によるノイローゼ患者」であったとすらいうわけでもない，ということを急いで付け加えておく必要があるだろう。私の考えでは，２０才でロマンティックに恋を夢見ている娘を「欲求不満にかかったアングロサクソンのオールド・ミスの典型」とす

るのには無理がある。ただ，彼女はJonesの言うように「ハック・フィンやベンジーのような欠点のある語り手」の一人だったのであり，そういう語り手として，しかしハックやベンジーよりはずっと意識的な語り手として，真剣に自分の経験したことを読者に伝え，熱心に読者を説き伏せようとしている。

> To me at least, making my statement here with a deliberation with which I have never made it, the whole feeling of the moment returns. (176)
>
> I scarce know how to put my story into words that shall be a credible picture of my state of mind. (198)
>
> It was not, I am as sure today as I was sure then, my mere infernal imagination. (241)

その他にも語り手としての言葉は数え切れない程，例を上げることができるだろう。語っている家庭教師は混乱していた当時の自分を冷静に見つめ，しかし混乱していた時も決して間違ってはいなかったのだということを読者に信じさせようとしている。そして読者はその説得を受けつつ，尚事実は家庭教師の言う通りではなかったかもしれないという意識を持ち続けるのである。

3

田舎の牧師の娘達の末娘という恐らく質素な生活をしていたであろう娘が，自分の小さな家とは比べものにもならぬ豪荘なブライ邸に行き，「女主人か特別の客」のように礼をされ，「最も上等の部屋の客用ベッド，彼女が触れてみんばかりになったベッド」と「生れて初めて頭のてっぺんから足の先まで見ることの出来る縦長の鏡」を与えられ(159)，年輩の家政婦のグロース夫人は，彼女を上役として扱うことを決めているらしく，何よりも教え子となるフローラは「ラファエルの聖なる子供」(161)のように美しい。彼女は自分の幸運に喜こび，しかし余り良すぎることに不安も感じ，自尊心を刺激され，そして何よりも自分が指導者だという責任感を味わったであろう。到着した次の日に彼女が「私達はほとんど大きな漂流船の一握りの乗客のように途方にくれていて，不思議なことに私が

その船の舵をとっていたのだ」(163—64)という言葉は，彼女の感じる心細さ，しかし他の者を守っているというヒロイックな責任感，更に大海を漂う漂流船というロマンティックな想像に走る彼女の傾向をよく表わしている。

この家庭教師が到着早々，まだ高揚したり打ち沈んだり眠れぬ程興奮している時に，大きな難問がふりかかってくる。もう一人の生徒となるはずのマイルズ退校を知らせる校長の手紙である。マイルズは他の少年達に害を及ぼすような悪い子供なのだろうか。一度も悪いことをしたことのない子供なんて子供とは認めないというグロース夫人の言葉も彼女を安心させてはくれない。しかし不安におびえる家庭教師の前に現われたマイルズ少年は，その妹フローラにも増して信じがたい程に美しく，家庭教師は「他の子供にはこの程度までには決して見ることのできなかったどこか神聖なところ」「この世で愛以外は何も知らないという説明しがたい風情」(171)をマイルズに見て，あの手紙との落差に当惑する。マイルズは無垢なのか堕落しているのか。全く相反する可能性の共存するこのマイルズの曖昧さが家庭教師の悩みを形成するのであり，最後まで読者をも惑わし続ける問題となる。家庭教師はマイルズに魅せられ，こんな美しい子供に退校処分とはグロテスクだと考え，次のような結論を下す。

> I reflected acutely that the sense of such individual differences, such superioties of quality, always, on the part of the majority ——— which could include even stupid, sordid head-masters ——— turns infallibly to the vindictive. (182)

結局これは校長の嫉妬心から出たものだ。マイルズが本当に悪ければ彼が罰をくらった跡ぐらいは見分けられたはずだ。「私は何も見つけられなかった。だから彼は天使なのだ(182)」しかし彼女がその解釈で完全に納得したのではないということは，彼女が魔法にかかったようになっていて，自分でもその時それに気付きながらその魔法に身をまかせていた，「それは，そうすることが苦痛をいやす薬になるからで，私にはその時苦痛の種がいくつもあったのだ」(183)と述べていることからも明らかであろう。彼女は内に不安を秘め，息をひそめるようにして子供達を見守っている。その時一つの不可思議な事件が起こるのである。

今まで「ねじの回転」に関する論争では，ピーター・クウィントの幽霊の実在が主に問われてきた。しかし私の考えでは，少くとも語り手の家庭教師にとってはマイルズとフローラの曖昧さこそが問題であった。彼女にとって幽霊は間違いなく存在していた。むしろ幽霊の出現は，子供達についての結論を出すきっかけを彼女に与えてくれた歓迎すべき出来事だったのである。

家庭教師はある日，見知らぬ不気味な男に出会う。その男がピーター・クウィントの幽霊だということをグロース夫人から聞かされ，彼が生前堕落した性格で知られていたことを知り，又その男が二度目に現われた時，自分以外の誰かを捜す様子をしていたと思った時，彼女は突然，その男は悪魔の使いでマイルズを堕落させにやってきたのだと判断する。いや，もう堕落してしまっている，だから自分が救わねばならないのだと考える。そう考える方が彼女の心理的傾向にかなっているからである。彼女は困難の状況にありながらそれに打ち勝つ自分を夢見，可哀そうな二人の身なし子を自分一人の手で守るというヒロイックな自己に陶酔し，更に自分が立派に勤めを全うすることを恋する雇い主の紳士にみて評価してもらいたいと願っているのである。

> . . . . . I was in these days literally able to find a joy in the extraordinary flight of heroism the occasion demanded of me. I now saw that I had been asked for a service admirable and difficult; and there would be a greatness in letting it be seen ——— oh, in the right quarter! ——— that I could succeed where many another girl might have failed . . . I was there to protect and defend the little creatures in the world the most bereaved and the most loveable, the appeal of whose helplessness had suddenly become only too explicit, a deep, constant ache of one's own engaged affection. We were cut off, really, together; we were united in our danger. They had nothing but me, and I ——— well, I had *them*. It was in short a magnificent chance. (199)

ピーター・クウィントの幽霊の出現に家庭教師は決して怯えることはなかった。それどころか，それは彼女の心理的要求を全て満足させてくれるはずの願っても

ない「チャンス」だったのである。彼女は自分のこの解釈を信じこもうとし，グロース夫人にも信じさせようとする。（グロース夫人に信じてもらえることは家庭教師にとって自分の考えが読者に――つまりは客観的に――認められることを意味する。確かにグロース夫人はGlenn A. Reed がいうように読者にとっての“testing ground”[7] となっている。しかし彼女は結局「信じる」のだろうか。）家庭教師は推測であるこの解釈を必死に「証拠」づけようとする。しかし彼女が「証拠」と思ってつかんだものは何と脆いものだろう。ジェイムズは決して家庭教師に「決定的証拠」を与えて安心させようとはしない。彼女は，マイルズはクウィントの幽霊に取り憑かれて堕落させられている，だから自分は彼を救わねばならない，という解釈に自己の全存在を賭けて破局に至るまで証拠を追い求め続けるのである。

4

マイルズが堕落している証拠を求めるにはクウィントの幽霊が実在することを前提とせねばならない。彼女は次のように言ってグロース夫人を説得している。

> I found that to keep her thoroughly in the grip of this I had only to ask her how, if I had "made it up," I came to be able to give, of each of the persons appearing to me, a picture disclosing, to the last detail, their special marks ---- a portrait on the exhibition of which she had instantly recognized and named them. (209)

ジェスル先生の幽霊を“recognize”し“name”したのはグロース夫人ではなくて，家庭教師自身だったということを彼女は忘れているらしいが，ピーター・クウィントの“identification”の件については家庭教師のいう通りであった。幻覚説を打ち出したEdmund Wilson もこの部分では口ごもり，A. J. A. Waldockはまさにこの一点が解けない限りウィルソン説は成立しないと断言し，[8] Alexander E. Jones も幽霊実在の動かぬ証拠の一つに数え上げている。私個人としてはそれに反対を唱えるつもりはないが，この部分はHarold G. Goddard[9] やJohn Silver[10] 等，幻覚説をとる人々が自説と矛盾しないこと

を熱心に説明しようとして，ある程度成功した部分でもある。彼らは家庭教師がグロース夫人にその男の描写をする時は，もう既に村の人達からクウィントの噂を聞いて知っていたのだと説明する。勿論家庭教師はそんなことは決して言わないが，グロース夫人が主人以外の「若くて美しい女」を好きなもう一人の男の存在をふと暗示しているのは事実であるし（169），グロース夫人にその男は村から来た人ではなかったのかと尋ねられた時，家庭教師が断固として「いいえ違います。貴女には言わなかったけれど，私確かめたのです」と言って，グロース夫人にも（読者にも）内緒で村まで調べに出かけたことをほのめかしているのも事実である（189）。作品には扱われていない場面を想定せねば成立しにくい読み方というのは少し苦しいが，馬鹿げた空想と一蹴してしまうわけにもゆかない。家庭教師が絶対と信じている根拠もそれ程絶対的でもなく，作品中で彼女以外の人物は決して幽霊の姿をみることはないという事実によって更に揺るがされる。しかし家庭教師にとっても読者にとっても，幽霊の実在よりも，マイルズ（とフローラ）が堕落しているかどうかの方が問題である。その証拠は子供と幽霊の間に霊的な交わりがあるという証拠であればいいだろう。家庭教師はその第一の証拠を，池のそばでフローラといる時に二人目の幽霊（彼女がジェスル先生と断定した）に出会った時の様子に求めようとする。幽霊を池の向こうに見，フローラがそちらに背を向けて遊びに熱中している様子を見た時，家庭教師はフローラがジェスル先生を見ているのに，ずるがしこくも見ていないと思わせようとしたのだと考える。勿論グロース夫人はそれに対して「どうしてフローラが見たとわかるのです」ともっともな質問を発する。幽霊の存在についてはグロース夫人は異を唱えようとはしなかった。しかしこの単純で素朴な愛情に満ちあふれた夫人に子供達が堕落していることを信じさせるには，もっと決定的な証拠が必要だったのである。

しかし家庭教師は証拠を得ていないことを一方で意識しながら（「もう少し証拠が現われるまでは誰もとがめたりはしませんよ」（216）とグロース夫人にいう）子供達をすっかり変った目で見ている。かってはマイルズへの疑惑を意識的に抑えて美しい子供達に夢中になっていた彼女が，今では「子供達の声を聞き子供達

を胸に抱きしめ，子供達のかぐわしい頬を顔に感じる時，彼らの無力さと美しさ以外は忘れ去った」という一方で，「その問題に決着をつける為に（フローラのみせた）ずるがしこさの印を数え上げずにはいられない」(210)のである。グロース夫人は「先生のお変りになりましたこと」(236)と怯え，家庭教師はますます熱心に彼女を説き伏せようとする。

グロース夫人がついに子供達の堕落を信じるのは２０章での池の場面の後である。ある日フローラが姿を消し，家庭教師が直観的に池のそばだと考えてグロース夫人とそこへ駆けつけ，フローラを見付ける。「ジェスル先生はどこなの」と今まで禁句であった名を口にしてフローラを問い詰めようとした時，家庭教師は折よくジェスル先生の幽霊を見る。

> I remember, strangely, as the first feeling now produced in me, my thrill of joy at having brought on a proof. She was there, so I was justified; she was there, and I was neither cruel nor mad. (278)

フローラとジェスル先生が一緒にいる所をみればグロース夫人も信じてくれるだろう。家庭教師はその霊に向って「声にならない感謝の言葉」(278)を送りさえする。しかしグロース夫人には見えなかったのだ。彼女は「何て恐ろしいことを。一体何が見えるというのです」(280)と叫んで全てを否定し，家庭教師は「自分の立場が足許から崩れ落ちる」のを感じる(280)。しかし崩れかけた彼女の立場は翌朝立直ることになる。何故なら，夜の間に熱をだしたフローラが，彼女の口から出たとは信じられないような言葉を口にし，グロース夫人もそれを幽霊の影響と考え「昨日のことにもかかわらず私も信じます」と言ったからである。グロース夫人が「聞いたのですよ。あの子の口から。恐ろしいことを，ね。本当にいろんなことをいうのですよ」(289) と言って泣き崩れた時，家庭教師は「まあありがたい。それで私が正しいことが証明出来ますわ」(280—90)と叫んでグロース夫人をぎょっとさせる。子供達が堕落しているという解釈に全存在を賭けた時，その解釈は間違っている方がいいという自然な感情は，家庭教師の中に入り込む余地もなくなっているのである。

このシーンは実在説の人達が実在の証拠の一つとしてあげたシーンである。何

故なら，それまで天使の如くに描かれていたフローラが初めてその隠されていた面を垣間見さすからであり，グロース夫人が初めてはっきりと「私も信じます」と断言するからである。しかしこの場面がグロース夫人ばかりでなく読者をも信じさす程の「証拠」となっていると考えるべきだろうか。やはり否である。グロース夫人が決して幽霊を見なかったという事実は重いし，グロース夫人自身が「そのような言葉は以前にも聞いたことがある（クウィントとジェスル先生が子供達と交わっていた頃を指して）」と認めているのだから（290），フローラが熱にうなされて記憶に残っていた言葉を口にするのは充分考えられることだからである。しかしグロース夫人はかねがね上司のいうことに全面的に賛成しきれないことに罪悪感を感じていて，今初めて「信じる」と言えたことに安堵感を覚えたのではないだろうか。ともあれ家庭教師はこのグロース夫人の支持を得て自分の解釈に再び自信を取り戻し，マイルズと最後に対決する勇気を奪い起こすのである。

池のそばでの事件の後熱病にかかったフローラをグロース夫人が連れ去った後，ブライ邸には家庭教師とマイルズの二人が残され，物語は最後の場面にさしかかる。場面の初めの家庭教師は自信に満ちている。マイルズに詰問を始めた時再び姿を現わしたピーター・クウィントを見てぎょっとするが，「これ程打撃を受けた女がこれ程の短時間に行動力を取り戻せたことはなかったと信じる」（303）と自慢する程であるし，「まるで人間の魂をめぐる悪魔との闘いだった」（303）と自分を神かキリストにみたてて語りさえする。しかしやがてマイルズが家庭教師の詰問に答えて学校でやったことを告白し始めると，彼女は次第に不安に陥入りだす。もともとマイルズへの疑惑を生み出した彼の退校の理由が，余りに罪のない行為だったからである。「僕いろんなことを言ったんだよ。…うううん，みんなにじゃなくて，名前は覚えていないけど。……ほんの数人。僕の好きな子たちにだよ。」マイルズは堕落しているという解釈には合わない返答だった。家庭教師はこの時全存在を否定されそうなパニックに襲われる。

> ..... within a minute there had come to me out of my very pity the appalling alarm of his being perhaps inncent. It was for the

instant confounding and bottomless, for if he *were* innocent, what then on earth was *I*? (307)

今の彼女にとってマイルズは“innocent”であっては困るのだ。そして読者はマイルズは“innocent”なのかもしれないということに「ぞっとする不安感」を感じる家庭教師に不安を感じると同時に，どうしてもみきわめることのできない現実への恐怖を家庭教師と共に感じるのである。家庭教師が失なわれそうになった「私」を立て直す必要を感じた時，折よくクウィントの顔が再び窓に現われる。家庭教師の様子から何ものかの存在を感じとったマイルズが「彼なの」と聞く。今こそ「全証拠をつかむのだと決心していたので」家庭教師は「彼って誰のこと」と容赦なく問いつめる。「ピーター・クウィントだよ」とマイルズがついに待ち望んだ名を口にした時，彼女はそれを「自分の献身への捧げ物」(309)と受け取り，ついに勝利を確信する。これが彼女のつかんだ最後の決定的な証拠だった。しかし読者も彼女と同じようにこれを「証拠」と受け取っていいだろうか。

この場面は実在説の人々が実在の三つの証拠の最後の一つと考える部分であるが，ここは曖昧な代名詞の多用で殊更に曖昧であり，幻覚説の人達の論法もさえて説得力を持つ部分である。家庭教師の詰問にあっているマイルズがクウィントの救いを求めているはずなのに，何故「彼がここにいるの」と聞かないで「彼女」とジェスル先生の名を先に出したのだろうか。それは彼が池での事件の後でフローラに会う機会を得てジェスル先生の幽霊の話を聞いていたと考えねば説明しにくい事実である。これを前提とすれば，マイルズがジェスル先生ではないといわれて「じゃあ彼の方なの … ピーター・クウィントだよ」とジェスル先生がいつも一緒だった男の名を連想して口にするのは自然なことである。そして多くの人の指摘するように，この時のマイルズの目には，ジェスル先生ばかりでなくクウィントの幽霊までもみるらしい家庭教師が不気味な存在に映り，「ピーター・クウィントだよ，悪魔め(Peter Quint — you devil!)」という言葉は，クウィントではなく家庭教師に向けていった言葉だったと解釈できるのである。そして最後にマイルズが死ぬのは，家庭教師がいうように「取り憑いていた悪魔

が離れた（dispossessed）」からではなく，決定的な一言を言わせようと必死にマイルズを抱きしめていた家庭教師が彼を窒息させてしまったのだという考えもそれ程突飛なものではない。最後のページの感歎符と強調のイタリックの多い家庭教師の言葉の中に，そして何度も跳び上ったりマイルズをつかんだりする動作の中に，自分の正しさを証明する以外の全てを忘れ去り，ヒステリックに喚きたてている彼女の姿をみることができないだろうか。

5

John Lydenbergは，マイルズとフローラの中には善と悪が共存しているのであり，家庭教師が余りにピューリタン的に純粋に善であることを要求した為に子供達を破滅に追い込んでしまったのだ，という。

> She looks upon them frist as angelic then as infernal, never as something in between. Unable to offer them the positive, sympathetic love which might have helped them develop as humans and accomodate themselves to the evil with which all men must by nature live, she can only strive to cast them in her rigid authoritarian mold. (11)

しかしこの作品の中で，マイルズとフローラは決してそのような天使でもなく悪魔でもなく，その二面性をそなえた存在としての人間を意味してはいない。「ねじの回転」が暗示しているのは（それがいかに非現実的であれ）子供達はみた通りの天使のように無垢か，悪魔的に堕落しているかのどちらかだということである。そして，どちらかではあるがどちらかはわからないということこそが，この作品の世界の現実であり，それが家庭教師の（そしてその手記を読む私達の）不安と，息詰まるようなサスペンスと，恐怖感を引き起こすのである。

このような相反対するもの（contraries）又は相矛盾するもの（contradictories）の共存こそを「曖昧性」と呼ぶべきだ，とShlomith Rimmonは定義づけ，「ねじの回転」とその他数篇のジェイムズの作品に於る「曖昧性」の効果は「読者を積極的なテキストの作り手」[12]とすること，そしてエッシャー

の絵画のように現実世界にある矛盾を解決することなく，そのまま作品の世界の中にとりこんだことにあると説明している。

> Ambiguity, whether visual or narrative, can enact not only the limitations of art but also its strenth. For . . . it is only in art that the existence of ghosts or of vampire relation can be simultaneously asserted and denied . . . Indeed, the creation of ambiguous works is one of art's way of solving the problem of contradictories —— solving it not by choice but by an artistic dramatization of their coexistence. (13)

ジェイムズにこのようなヌーヴォー・ロマン的意図があったかどうかは知らない。しかし確かにRimmonのいう「曖昧性」がここにある。そしてジェイムズの小説を現代の「反小説」にまで引きつける彼女の説は魅力的ではある。しかしやはり「ねじの回転」で大切なことは，作者が一人の人物の「視点」にその「曖昧性」をみさせ，その人物に一つの解釈をさせているということであるといわねばならない。即ち，読者の目の前にあるのは曖昧な世界そのものではなく，その世界に対する家庭教師の主観的解釈である。彼女がいかにも彼女らしい解釈——彼女の環境や性格や心理状態の決定する解釈——を示すことである。結局それはジェイムズの後期の作品に多い「見る」ということそのものを描いた作品——例えばジェイムズが *The Ambassodors*(1903)について，この作品の仕事はストレザーの "process of vision" を描くことだ，といったように[14]——の一つであると考えた方がいいかもしれない。彼女も「見る」ということによって一つの世界を作り上げている。ただ，彼女はストレザーのように啓示の瞬間を与えられることもなく，自分の世界が常に揺れ動いているのを意識している。この彼女の眼はストレザーの眼よりも *The Wings of the Dove*(1902)や *The Golden Bowl*(1904)のような，私が「劇的小説」と呼びたい複数の視点の存在する世界に於る人物達の眼に似ている。*The Wings* のミリーやケイトやデンシャーのように，*The Golden Bowl* のプリンスやプリンセスのように，家庭教師も限られたものしかみえない眼を与えられているのである。Kevin Murphy が家庭教

師の解釈が主観的解釈であれば，ダグラスだって（彼の家庭教師の見方は確かに歪んでいた）いや最初の「私」だって（家庭教師の恋をあんなに強調するのは，小説家とすればかなり通俗的な小説だ）主観的解釈をしていると述べている。[15] それは多少読みこみすぎにせよ，ジェイムズがこの作品の中で家庭教師の「視点」を使って描いたものは人間の目の不確かさ，現実の曖昧さ，そしてその不確かな目で一つの世界を作り上げてゆかねばならない時に人間の感じる心細さ，不安，恐怖であったとはいえるだろう。そして，その曖昧性を含んだ「ねじの回転」を読む時の私達自身も，やはり主観的解釈をすることを余儀なくされているのである。

NOTES

1. Cf. Wilson, "The Ambiguity of Henry James," *Hound & Horn*, VII (April – June, 1934), 385–406, reprinted in *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw"*, ed. Gerald Willen (New York, 1960), pp. 115-53.
2. 上記 *A Casebook* には14編の論文が含まれているが，はっきりと幻覚説をとっているのは6編，実在説は5編である。
3. Jones, "Point of View in *The Turn of the Screw," A Case book,* pp. 316-17.
4. *Ibid*., pp. 299-300.
5. Henry James,"The Turn of the Screw," in *The Novels, and Tales of Henry James* (New York: Scribner's, 1907-09), XII, 149.
6. Cf. Cargill, "Henry James as Freudian Pioneer," *A Casebook,* pp. 223-38.
7. Reed, "Another Turn on James's *The Turn of the Screw," A Casebook,* p. 196.
8. Cf. Waldock, "Mr. Edmund Wilson and *The Turn of the Screw," A Casebook*, pp. 171-73.
9. Cf. Goddard, "A Pre-Freudian Reading of *The Turn of the Screw," A Casebook*, pp. 244-272.
10. Cf. Silver, "A Note on the Freudian Reading of *The Turn of the Screw," A Casebook*, pp. 239-43.
11. Lydenberg, "The Governess Turns the Screws," *A Casebook,* p. 290.
12. Rimmon, *The Concept of Ambiguity -- the Example of James* (Chicago, 1977), p. 228.
13. *Ibid.,* p. 234.
14. *The Art of the Novel: Critical Prefaces by Henry James,* ed. Richard P. Blackmur (New York, 1934), p. 308.
15. Cf. Murphy, "The Unfixable Text: Bewilderment of Vision in *The Turn of the Screw, " TSLL,* Vol. 20 (Winter 1978), 538-51.